

《 北海道 》

第 63 回北海道音楽教育研究大会 空知岩見沢大会

全道共通主題 「音楽のよさを分かち合い 確かな力を育む音楽教育」

大会主題 「わかる楽しさ できるよろこび わかちあう感動」

～響きあい、深まる音楽の学びをめざして～

令和3年度の北海道音楽教育研究大会は岩見沢市で開催され、まなみーる岩見沢市民会館・文化センター、北海道岩見沢西高等学校の2会場、及び会場からオンライン配信によるハイブリッド形式で行った。研究大会では、研究発表・研究協議、講演を行い、全空知音楽教育連盟の研究の成果を発表した。

1. 大会主題設定の理由

全道共通主題は、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる力を「確かな力」と位置付けている。また、音楽的な見方・考え方を働かせながら、資質・能力の三つの柱をバランスよく育成することが、「確かな力」を育むことになると考えている。

その際、音楽自体のもつ楽しさや美しさなどの音楽的な価値、その価値を生かした音楽活動の楽しさを「音楽のよさ」としてとらえた学習を展開し、分かちあっていくことで「確かな力」が育まれると考えている。そのことを受け、本大会では、空知の児童生徒の実態を踏まえ、大会主題「わかる楽しさ できるよろこび わかちあう感動」を設定した。

楽しさは「わかる」ことから生まれる、よろこびは「できる」ことから生まれると捉えてきた。このことは他教科においても同様であると考えている。また、「わかる」「できる」ことにより心が揺さぶられ、感動が広がると考える。

音楽科の学習における感動体験は、生涯にわたって音楽を愛する心を支え、豊かな情操を培う源となる。そして、感動は場や音楽、感情の共有により、一人ひとりの感動をさらに深めていく。

音楽科においては、児童生徒が「知覚・感

受する」、つまり「聴き取る・感じ取る」ことが学習の基礎となっている。したがって、児童生徒が知覚した（聴き取った）ことをいかに分かりやすく正確に伝えるか、感受した（感じ取った）ことをいかに豊かに伝えるかということがとても大切になる。

だからこそ、教師は指導において、児童生徒が音楽に関わる語彙を豊かにし、音楽を磨くことができるよう求められているのである。音や言葉のコミュニケーションにより〔音楽のよさを伝えあい、感動をわかちあうことのできる児童生徒〕を育てていくためにも、児童生徒の学びがどのように展開するのかを予測し、彼らの思考の流れを大切に授業づくりを行うことが必要であると考えている。

「響きあい」という言葉には、自分自身に音や音楽が響き、そこで終わることなく、他者（人・音・もの）との響きあいがあり、さらに音楽作品との響きあいも生まれるという意味合いを込めている。このとき、これまでに得た知識や音楽経験など、様々な事象との響きあいを意識することも重要である。これらの響きあいは、協働して音楽活動を行うところから、広がりを見せてくれる。そのことで、楽しさをわかちあい、学びの深まりへとつながる。

学びの深まりとは、音楽への理解が深まり（知識・技能）、他者への共感と理解が深まることで、自己の思考や判断が更新され、表現が深まることであると考えている。

本研究では、児童生徒をさまざまな事象と関わり響く個としてとらえ、個同士の関わりを重視していく。そのことによって、個人の響きが意思をもって「響きあい」、学びの深まりが可能となると考える。

2. 研究の内容

現行の学習指導要領は、令和2年から小学校を皮切りに中学校においても全面実施となっている。本研究では、その点も踏まえ、次に示す内容を設定し、研究を推進してきた。

空知の児童生徒の現状として、歌唱や器楽などの表現活動には、教師の指導のもと意欲的に取り組むことがあげられる。鑑賞活動においては、楽曲を楽しんで聴く姿が見られる。

その一方、自分なりの思いをもって表現したり、楽曲を自分なりの考えをもちながら鑑賞したりすることを苦手としている児童生徒が多い。そこで、本研究の目指す児童生徒像を以下のように設定する。

【わかる】 曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解することができる。(知識)
知覚と感受を結び付けて理解できる。(知識)
表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付ける。(技能)

【できる】 音や音楽に親しみ、様々な場面で思いや意図をもち、音楽表現を工夫したり、音楽を味わって聴いたりできる。(思考力・判断力・表現力等の育成)

【わかちあう】 協働して音楽活動をする楽しさをわかちあい、感じ方や考え方の多様性を認めあい、自分の知識や表現を拡大し深めていく。(学びに向かう力、人間性等の涵養)

このような目指す児童生徒像から、本研究の視点を以下の3点に設定した。

【わかる】学習内容を焦点化した題材構成と学習活動の工夫（視点1）

学習内容が明確になるように、[共通事項]を焦点化し、題材を構成する。そのため、音楽を形づくっている要素のうち、どのような要素を知覚させるのか、その要素の働きによって、どのような特質や雰囲気を感じたのかということ、それぞれ確認し、知覚と感受を結び付けて学習させることで、児童生徒

の学びがより深まるものとする。

また、思いや意図を実現するために必要な知識・技能の習得については、単に知ればよいということではなく、そのことが学習活動を通し、実感を伴って知識・技能を更新し、学びが深まるよう、学習活動を工夫していくことが大切であるとも考える。そのため、以下の内容を具体的な研究の視点とした。

□題材構成

児童生徒が知覚と感受を結び付けながら、学びを深めることができるように [共通事項] に着目し、学習内容を焦点化する。

□学習活動の工夫

共通事項や音楽の構造への気づきにつながる活動（リズム打ち、模倣、指揮等、体の動きを取り入れる）や比較・関連付ける活動、学習カード・プリント、ICTの活用法を児童生徒一人ひとりが対象の音楽との関わりを深められるよう工夫していく。

【できる】学びを支える指導と評価の工夫（視点2）

主体的・対話的で深い学びを支える教師の働きかけや価値づけ、児童生徒の学びを見とる評価（目標に結びついた評価）を行っていくことで、児童生徒の思いもより深まるものとする。授業においては、児童生徒が表現したことを、教師が指導と評価に生かすことが重要であるとする。そのため、以下の内容を具体的な研究の視点とした。

□学びを支える指導

- ・教師の働きかけや価値づけ
 - 発問のあり方（思考・判断させるために）
 - 学びの方向性、見通しの持てる働きかけ
 - 思いや意図を引き出す言葉かけ
 - 学びが深まる価値づけ（よさの見とり）
- ・目標～達成まで、児童生徒の思考の流れを大切に授業構築

□評価の工夫

- ・評価規準とA判断の姿，C判断への手だてを想定
- ・児童生徒の学習改善に資する情報提供
- ・振り返りの設定と活用（次の授業改善へ）

【わかちあう】共感・協働の考え方を生かした活動場面の工夫（視点3）

伝えあい，認めあう活動を重視し，他者の考えや思いに触れることで，児童生徒が自分の感じ方や考え方を広げ，学びを深められるよう，以下の内容を研究の視点とした。

- ・他者と関わる場面の設定，工夫
- ・生活や社会の中の音や音楽との関わり
- ・音楽科の特質に応じた言語活動の工夫

3. 研究の成果

これらの大会主題，及び研究内容に基づき，授業研究，講習会の実施などを通して，特に授業づくりに重点を置いた研究を推進してきた。その際，表現における思いや意図の育成，創作における思考を深める学習活動を課題としてきた。

本研究大会では，3つの分科会で本連盟の成果を研究発表した。具体的には，題材全体を通して授業場면을撮影し編集した内容を発表した。これにより題材構成全体の流れと子供の活動を伝えることができ，題材全体を通した児童生徒の学びについて研究を深めることができた。

研究協議では，研究発表者，授業実践者と共に，札幌市や旭川市など全道他地区の小中学校教諭が協議に参加し，実践交流を通しながら，研究を深めることができた。また，小中合同で研究発表，研究協議を行ったことにより，義務教育9年間を通した児童生徒の育ちについて研究を深められたことも大きな成果となった。

《研究協議写真》



4. 今後の課題

本大会は，【わかる楽しさ できるよこびわかちあう感動】を研究主題とし，音楽科の原点である感動を大切にすること，子供の実態を出発点とすることを基本方針として研究を進めてきた。

大会開催にあたっては特別な授業ではなく，日常実践の延長を公開し，どの学校でも実践可能であり，しかもその実践は理論的な裏付けがあることを大切にしてきた。これから求められる授業は，音楽の内容を習得するとともに，児童生徒と教師が互いに学び育ち合う関係をつくっていくことが大切であると考えられる。他者との関係性のなかで，児童生徒の主体的な学びがひろがる授業の在り方について，さらに研究を進めていきたい。

一方，新型コロナウイルス感染拡大により，臨時休校措置，分散登校など，かつてない状況が引き続き喫緊の課題である。児童生徒と教師の安全を守ることを前提に，音楽活動の楽しさや豊かな学びを保障していくことも，ますます必要になると考える。

今年度の研究大会の成果とともに，今後も全道各地における研究の成果を交流し合いながら，音楽のよさを分かち合い，確かな力を育む音楽教育を推進していきたい。